

幼児の事態「描写」・「把握」の型の獲得時期について
 —日本語・英語を母語とする幼児に焦点をあてて—
**When do children acquire the language-specific way of perceiving and
 describing events?**
 —Focusing on Japanese and English native infants—

伊藤 創[†]

Hajime Ito

[†]関西国際大学

Kansai University of International Studies

h-itou@kuins.ac.jp

Abstract

日英語母語幼児は言語獲得初期段階においては、いずれも animacy の高い参加者に焦点をあて事態を把握・描写するが、成長に伴って前者は empathy の高い参加者に、後者は action chain の開始点である参加者に焦点をあて、それぞれを主語として描くという顕著な傾向の違いを見せるようになる。本研究では、この違いはすでに3歳児で現れること、さらに empathy の高い参加者を主語とする際に重要な受身表現についても日本語母語幼児は3歳児の時点で一定の使用を見せ、4歳児以降、大幅な増加を見せることが明らかになった。

Keywords — 事態把握, 事態描写, 言語獲得, Animacy, Empathy

1. はじめに

客観的に同一の事態であっても、それをどのような視点から、どこに焦点をあて、どのような言語的手段を用いて描くかには、言語間で大きな相違があることがこれまで数多く指摘されてきた (Whorf, 1956 ; 国広, 1974 ; 池上, 1981 ; Hinds・西光, 1986 ; Slobin, 1987 ; Talmy, 2000 ; 金谷, 2004 など多数)。また、こうした各言語における事態「描写」の型が、その言語話者の事態「把握」の型にも影響を与えている (従って異なる言語を話す話者の間では事態の認識のあり方が異なる) という「言語相対論」、いわゆる「サピア・ウォーフの仮説」についても、これまで様々な形での検証実験が試みられている (Heinder, 1972 ; Au, 1983 ; Papafragou et al., 2008 ; Boroditsky & Gaby, 2010 など)。

2. 日英語話者の事態「把握」「描写」の型

こうした事態「描写」および「把握」の型について、伊藤 (2015)、伊藤・王 (2016)、伊藤 (2018) の一連の研究では、特に図1のような〈一方から他方への働きかけがなされる事態〉をとりあげ、日英語母語話者の比

較を行っている。

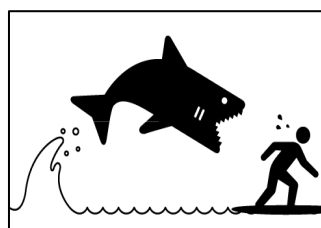


図1

これらの調査では、様々な〈働きかけ〉に関する画像が提示され、被験者はそれらを自由に描写することが求められた。それらの描写を比較するとほとんどの画像において、英語母語話者は(1)のような動作主 (agent) に焦点をあて描く傾向が日本語母語話者に比べて強く、一方、日本語母語話者は、(2)のような被動作主 (patient) に焦点をあて描く傾向が英語母語話者より強かった (伊藤, 2015 ; 伊藤・王, 2016)。

(1) A shark jumps from the water to attack a drunken man on the shore.

(2) 男の人がサメに食われそうになっている。

(伊藤・王, 2016, p31; 下線筆者)

さらに、別の被験者を対象とした、提示された事態の「次」の事態を想像して描かせるという調査においても、(3) (4) に示すように、英語母語話者は agent に、日本語母語話者は patient に、それぞれ焦点をあて描く傾向がより強くみられた (伊藤, 2018)。

(3) The flying shark knocks the man off the surfboard.

(4) 逃げ切れなかった男性は、サメに食べられました。

(伊藤,2018; 162)

次の事態を描く際には、その事態でより焦点をあてて〈捉えて〉いる参与者について描くのが自然であると考えられることから、両言語話者の事態「描写」の型の違いは、両者の事態「把握」の型の違いに根ざしていることが強く示唆される。これら一連の研究結果から、伊藤(2018)は、英語母語話者は行為連鎖(action chain)の最初に位置する参与者(エネルギーの発出点)により際立ちを感じて捉え、描く傾向にあり、一方日本語母語話者は、話者にとって共感度(empathy)の高い参与者(自らにより近い存在)に際立ちを感じて捉え、描く傾向にあると主張している。

3. 「型」の習得

本研究では、こうした日英語に特有の事態把握・描写の型の「獲得」について、特に以下の二つの観点から、両言語を母語とする幼児に事態描写調査を行った。

3.1. Action chain, empathy による事態把握

幼児の言語獲得は、一般的な認知的な制約によって通言語的な事態把握・描写が見られる段階から、徐々にその母語に特有の事態把握・描写を行う段階へ進むと考えられる。

上述のような agent, patient の関わる事態について言えば、幼児は、animacy の高い参与者を agent に、animacy の低い参与者を patient として捉え、描く傾向があることが報告されている(Bowerman,1973; Chapman & Miller,1975)。したがって、幼児が産出する他動詞文は、初めは animacy に差がある、すなわち animacy の高い参与者が主語、低い参与者が目的語である文が多く、両者に animacy に差がない他動詞文、あるいは animacy が低い参与者のほうを主語に立てる他動詞文の産出は少ない(Tanaka & Shirai, 2014)。

主語として描かれる参与者は、話者がより際立ちを感じる参与者であり、したがって焦点をあてる対象となりやすいとされるが(Langacker,1990)、この animacy の高さが焦点を向ける参与者を決定する際の重要な要素であることは通言語的な傾向であると考えられる(Bates & MacWhinney,1989)。

このように幼児は言語獲得の初期段階においては、その母語によらず、animacy の高い参与者を agent に、低い参与者を patient として捉え描く傾向を持つが、成長に伴って、1) animacy に差がない参与者間での働きかけに関わる事態(例:サメが人を襲う)、あるいは、2) animacy が低い参与者から高い参与者への働きかけがなされる事態(例:津波が人を襲う)等についてもその把握・描写が行えるようになる。このように様々な事態把握・描写法を獲得する段階においては、その把握・描写における各言語母語話者特有の傾向も同時に獲得されることが予想される。

本研究では、特に1)の事態に焦点をあて¹、成人の日・英語母語話者に見られる、前者は empathy の高い参与者を、後者は action chain の開始点である参与者に焦点をあて捉え、その参与者を主語として描くという傾向の違いを幼児がいつ頃獲得していくのかを見る。

3.2. 受身表現の使用

また母語特有の把握・描写を獲得するにあたっては、それぞれの言語がもつ固有の構造が、その獲得のあり方に影響を与えることが指摘されるが(Choi & Bowerman,1991; Maguire et al., 2010; Gentner, 2003)、本研究では、特に「受身」表現の使用(獲得)について、日英語母語話者の幼児を比較する。〈働きかけ〉に関わる事態については、特に patient に焦点を当てて描く場合、その描写に「受身」表現が非常に重要な役割を果たすからである。

受身形については、英語母語話者は、4 から 9 歳にかけて獲得することが報告されている。能動形に比べ受身形の獲得が遅れることは、当該形式の形態的な複雑性(Slobin,1966; Brown,1973)、および視点の転換という認知的操作の高度さ(Tomasello,2003)などから説明がなされる。一方で、Allen & Crago (1996)が指摘するように、動詞の受身形は、その形態的な複雑性にもかかわらず、その母語によっては、比較的早い段階での獲得が見られることもある。彼らは、イヌイットの子供が 2 歳前後には受身形を獲得していることを明らかにしているが、これは複雑であっても、インプットが多ければその形式は早期に獲得可能である可能性を示している。形態の複雑性による当該形式の獲得順序という通言語的な一般的制約を、言語特有の構造が上回

¹ 伊藤(2020)では、成人日英語母語話者に、無生物(特に自然の力)が Animacy の高い人に働きかけている事態(津波が人を襲う、強風が傘

を持った人を飛ばそうとしている、等)について描写調査を行なっているが、このような事態においては、両話者とも empathy の高い patient (=人)に焦点をあてた描写が多く見られた。

った形での獲得を促している例であるといえる (c.f., Moerk,1980).

日本語を母語とする子どもにおいても、自・他の区別を含め、様々な動詞の活用形の獲得について、大久保(1967),岩立(1981),伊藤(1990),Nomura & Shirai(1997),中西(2016)等、数多くの調査がなされているが、大伴・宮田・白井(2015)が指摘するように、現在に至るまで「動詞の多様な形が生産的に使われるようになる過程や順序性の有無については、ほとんど明らかになっていない(p1)」。

この点にも鑑み、本研究では〈働きかけ〉に関わる事態について、日英語を母語とする幼児が、1) empathyあるいはaction chainのいずれを重視して焦点をあてる参加者を決定するか、という事態「把握」の傾向、2) こうした事態の描写に関わる受身形の使用という事態「描写」の傾向をいかに獲得するかを明らかにするため、下記の調査を行った。

4. 調査と結果

4.1. 調査1：焦点をあてる参加者

まず、英語母語幼児(3歳児18名・4歳児30名)、日本語母語幼児(3歳児50名・4歳児50名)に、様々な働きかけに関わる事態が描かれた12枚の画像²を提示し、その事態を口頭で描写してもらった。描写は文字起こしした上で、(5)のような動作主(agent:図1では〈サメ〉)に焦点をあてた描写(「agent focus(以降, AF)」)、(6)のような被動作主(patient:図1では〈ヒト〉)に焦点をあてた描写(「patient focus(以降, PF)」)に分類し、その割合を比較した(図2)。

AFの描写例

- (5) a. Shark.
 b. The shark is going to eat him.
 c. サメ.
 d. サメが食べようとしてる.

PFの描写例

- (6) a. A man was running himself away from a shark.
 b. Someone is getting eaten by a shark.
 c. サメに食べられそうなところ.

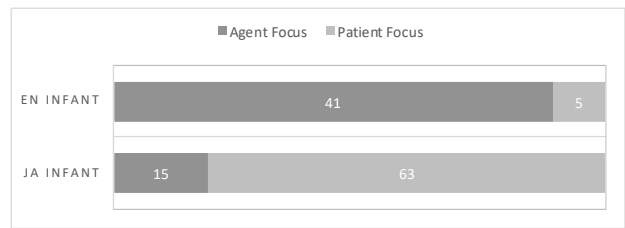


図2 図1についての日英語母語幼児の描写の比較

図2に示すように、大学生以上の被験者が対象の伊藤(2015),伊藤・王(2016),伊藤(2018)で見られた傾向と同じく、英語母語幼児はAFで描く傾向が日本語母語幼児より有意に強かった($\chi^2(1) = 57.085, p < 0.1$)。さらにこの有意な傾向差は、提示した12枚のうち8枚の画像で見られた。以下に例を示す。

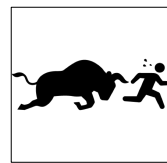


図3-1

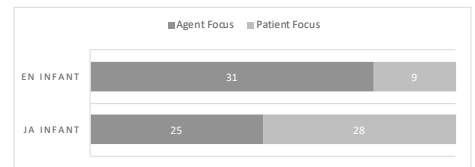


図3-2 $\chi^2(1) = 8.7534 P < 0.1$

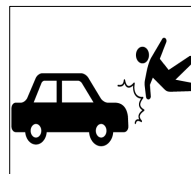


図4-1

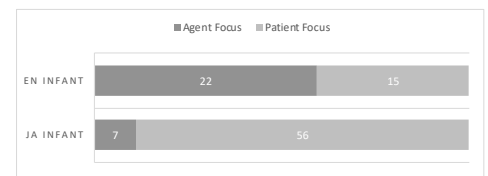


図4-2 $\chi^2(1) = 6.464 P < 0.1$



図5-1

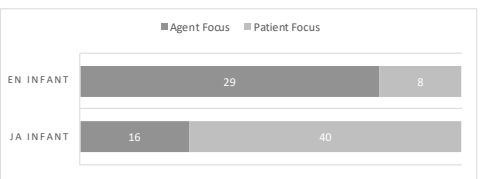


図5-2 $\chi^2(1) = 26.463 P < 0.1$

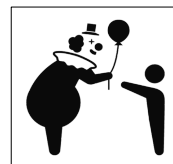


図6-1

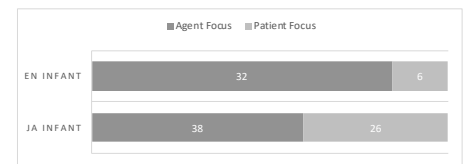


図6-2 $\chi^2(1) = 6.830 P < 0.1$

² 伊藤(2018)で用いられた画像のうち幼児には理解しにくいと考えられるものを除いた10枚に、新たに2枚を追加した12枚(ただし

し、〈自然の力〉がagentである画像については、注1の理由から今回は分析の対象としない)。

これらから、3~4歳の時点で、英語母語幼児は action chain の先頭の参加者に、日本語母語幼児は共感度の高い参加者に、それぞれ焦点を当て捉えやすいという各言語に特有の事態「把握」の型を獲得していることが示唆される。描写には、(5a) (5c) のような一語文も少なからず見られるが、そのような段階であっても、事態のいずれの参加者に焦点を当てて捉えやすいか、すでに日英語母語話者で差が出ているのである。

4.2. 調査2：受身の使用

この事態「把握」のあり方に加え、本調査では幼児の「描写」のあり方が、どのように成人のそれに近づくのかについて、受身形の使用という観点から分析を行った。日本語母語話者に特徴的な PF の描写の場合、成人の描写では、形態的に複雑な形式である他動詞の受身形の使用頻度が高いが、当該形式の使用がいつ頃、またどの程度みられるのかを日本語母語の5歳児50人から新たに描写データを加えて調査した。

幼児の描写を AF, PF に分けた上で、(7) (8) のように動詞の自他・活用形によって描写を分類し、各年齢におけるそれらの出現割合を比較した (図7)。

- (7) a. サメが出てきてる。(AF,自動詞)
- b. サメが食べようとしてる。(AF,他動詞)
- (8) a. サメに食べられそうなところ。(PF,他動詞かつ受身)
- b. サメにつかまりそう。(PF,自動詞)



図7 図1に対する各分類の出現割合

特徴的なのは、形態的に複雑な受身形を用いた描写が3歳児にも一定の割合で見られること、4歳児になるとその割合がかなり大きくなり、成人の描写とほぼ同様になることである。以下、同様の傾向を示す例を描写された画像とともに示す。

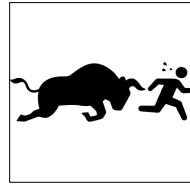


図3-1 (再掲)



図3-3



図4-1 (再掲)



図4-3



図5-1 (再掲)



図5-3

4.3. 結果の考察

調査1においては、英語母語幼児と日本語母語幼児を比較した場合、3~4歳の時点で、前者は action

chain の先頭の参加者に焦点を当てる傾向が後者よりも強く見られた。調査で示した画像が、animacy に差がない参加者間における働きかけの事態であったことに鑑みると、これは日本語母語幼児が、empathy の高い参加者に焦点をあて捉えるという事態「把握」を獲得しつつあることを示していると考えられる。すなわち、言語を獲得していく中で注意の向け方が日本語母語話者特有の方向に修正されていくということであろう。

調査 2 においては、日本語母語幼児は、3 歳児の時点ですでに一定程度、受身表現を用いることができること、また 4 歳児の時点では、特にその使用が顕著になることが明らかになった。これは、動詞の活用という点においても、成人と同様の受身を用いて描くという事態「描写」の型を獲得していることが示唆される結果である。また形式的には複雑である受身形式であっても、高頻度であれば早期に獲得できるという上述の先行研究の結果を指示する結果でもある。

一方、英語母語幼児は、12 枚の画像のうち、3 歳児で受身を用いて表現をしたのは 1 枚、それも 1 描写のみであった。また、4 歳児でも、一枚の画像につき、数例出るものがある程度である。ただし、これは、受身表現を英語母語幼児が獲得していない、ということの意味するわけではない。(成人の)英語母語話者にとって、これらの事態が受け身を用いて PF で描写するのが自然な事ではなく、その描写の傾向が幼児にも現れているだけでも考えられるからである。逆に言えば、英語母語幼児は、こうした事態を action chain の先頭の参加者に焦点を当てて描くという成人英語母語話者の描写の「型」をそのまま受け継いでいる、と言えるであろう。

5. 結語

以上、本研究では、日英語母語幼児を対象に、様々な〈働きかけ〉に関わる事態について、幼児の通言語的な事態把握・描写の傾向が、成長に伴って各言語に特有の事態把握・描写の型に移りゆく過程について調査を行った。

幼児は言語獲得初期段階においては、通言語的に animacy の高い参加者を agent に、低い参加者を patient として捉える(描く)特徴を持つ。すなわち、前者により焦点を当てて捉えるわけであるが、animacy に差がない事態については、animacy 以外の基準によって、焦点をあてる参加者を決定する必要がある。成人については、日本語母語話者は empathy の

高い参加者に、英語母語話者は action chain の開始点である参加者に焦点をあて、それぞれを主語として描くという顕著な傾向の違いを見せるが、この傾向はすでに 3 歳児で現れていた。さらに patient を主語とする場合、受身表現の獲得が重要な鍵となるが、本調査では、これについても 3 歳児の時点で一定の獲得を見せ、4 歳児以降、大幅な使用の増加を見せることが明らかになった。

こうしたことから、平均的には、日本語母語幼児が empathy を基準として事態を捉えることをおよそ 3 歳児の時点で、また受身表現については、早い者では 3 歳～4 歳児の時点で、獲得しつつあることが示唆された。

ただし、英語母語幼児が empathy という概念、あるいはそれを以って事態を捉えること、あるいは受身表現を理解(獲得)していないことを意味するわけではない。本調査で対象としたような事態については、その適用が(成人の英母語話者と同様)見られなかったということであるので、英語母語幼児におけるこれらの獲得については、今後の調査課題としたい。

参考文献

- [1] Allen, S., & Crago, M., (1996) "Early passive acquisition in Inuktitut", *Journal of Child Language*, 23,1, pp.129-155.
- [2] Au, T. K., (1983) "Chinese and English counterfactuals: The Sapir-Whorf hypothesis revisited", *Cognition*, 15, pp.155-87.
- [3] Bates, E. & MacWhinney, B., (1989) "Functionalism and the Competition Model", *The Cross-linguistic Study of Sentence Processing*, pp.3-73.
- [4] Boroditsky, L. and Gaby, A., (2010) "Remembrances of times east: Absolute spatial representations of time in an Australian Aboriginal community", *Psychological Science*, 21, (1), pp. 1635-1639.
- [5] Bowerman, M., (1973), "Structural Relationships in Children's Utterances: Syntactic or Semantic?", *Cognitive Development and the Acquisition of Language*, pp.197-213.
- [6] Brown, R., (1973) *A first language: the early stages*, Harvard University Press.
- [7] Chapman, R. S. & Miller, J. F., (1975) "Word Order in Early Two- and Three-Word Utterances: Does Production Precede Comprehension?", *Journal of Speech and Hearing Research*, 18, pp.355-371.
- [8] Choi, S. & Bowerman, M., (1991) "Learning to express motion events in English and Korean: the influence of language-specific lexicalization patterns", *Cognition*, 1991, 41(1-3), pp.83-121.
- [9] Gentner, D., (2003) "Why we're so smart", *Language in mind*, pp.195-236.
- [10] Heider, E. A., (1972) "Probabilities, sampling and ethnographic method: The case of Dani colour names",

- Man,7,3, pp. 448-466.
- [11]Hinds, John・西光義弘, (1986) Situation and person focus: 日本語らしさと英語らしさ東京, くろしお出版.
- [12]池上嘉彦, (1981)「する」と「なる」の言語学: 言語と文化のタイポロジーへの試論, 大修館書店.
- [13]伊藤創 (2015), “事態参与者の認知的際立ちの決定要因についての一考察”, コミュニケーション研究叢書, 13, pp.9-17.
- [14]伊藤創・王蓓淳, (2016) “日本語・中国語・英語における事態把握の「型」と事態描写の「型」の関連性”, 政大日本研究,13,pp.21-47.
- [15]伊藤創, (2018) “日英語母語話者における事態の描き方の型の違いと事態の捉え方の型の違い”, 言語研究, 154,pp.153-175.
- [16]伊藤創, (2020) “「母語話者らしい表現」の習得についての一考察: 「無生物主語構文」に焦点をあてて”, 科学研究費助成事業助成金報告書 (課題番号 17K04853): 「ことばの教育」における教員養成の連携に向けて, pp. 73-82.
- [17]伊藤克敏, (1990) こどものことば: 習得と創造, 勁草書房.
- [18]岩立志津夫, (1981) “日本語児の動詞形の発達について”, 学習院大学文学部研究年報,27, pp.191-205.
- [19]金谷武洋, (2004) 英語にも主語はなかった: 日本語文法から言語千年史へ, 講談社.
- [20]国広哲弥, (1974) “人間中心と状況中心: 日英語表現構造の比較”, 英語青年, 119,11, pp.48-50.
- [21]Langacker, R. W., (1990) “Subjectification”, Cognitive Linguistics 1, pp.5-38.
- [22]Maguire, M., Hirsh-Pasek, K., Golinkoff, R.M., Imai, M., Haryu, E., Vanegas, S., & Sanchez-Davis, B., (2010) “A developmental shift from similar to language specific strategies in verb acquisition: A comparison of English, Spanish and Japanese”, Cognition,114, pp.299-319.
- [23]Moerk, E. L., (1980) “Relationships between parental input frequencies and children’s language acquisition: A reanalysis of Brown’s data”, Journal of Child Language,7, pp.105-118.
- [24]中西ゆうこ, (2016) “日本語を母語とする二幼児の自動詞・他動詞の誤用”, 県立広島大学人間文化学部紀要, 11, pp.75-85.
- [25]Nomura, M. & Shirai, Y., (1997) “Overextension of intransitive verbs in the acquisition of Japanese”, Proceedings of the Twenty-Eighth Annual Child Language Research Forum, pp. 233-242.
- [26]大久保愛, (1967) 幼児言語の発達, 東京堂出版.
- [27]大伴潔・宮田 Susanne・白井恭弘, (2015) “動詞の語尾形態素の獲得過程: 獲得の順序性と母親からの言語的入力との関連性”, 発達心理学研究, 26,3, pp.197-209.
- [28]Papafragou, A. Hulbert, J. and Trueswell, J., (2008) “Does language guide event perception? : Evidence from eye movements”, Cognition, 84, pp.189-219.
- [29]Slobin, D. I., (1966) “Grammatical transformations and sentence comprehension in childhood and adulthood”, Journal of Verbal Learning and Verbal Behavior, 5, pp.219-227.
- [30]Slobin, D. I., (1987) “Thinking for speaking”, Proceedings of the Thirteenth Annual Meeting of the Berkeley, Linguistics Society, pp.435-444.
- [31]Talmy, L., (2000) Toward a cognitive semantics Volume II: Typology and Process in Concept Structuring. (訳: 高尾享幸 (2000) “イベント統合の類型論”, 坂原茂 (編) 認知言語学的发展東京: ひつじ書房), pp.347-451.
- [32]Tanaka, N. and Shirai, Y., (2014), “L1 acquisition of Japanese transitive verbs: How do children acquire grammar in the absence of clear evidence?”, Japanese/Korean Linguistics, 21, pp.281-295.
- [33]Tomasello, M., (2003) Constructing a Language, Harvard University Press.